

ART PLATFORM SYMPOSIUM 1

第1回文化庁アートプラットフォームシンポジウム

グローバル化する美術界と『日本』： 現状と未来への展望

2019年9月11日(水) 15:00～17:45 (受付開始14:30)

国立新美術館 3階 講堂 (東京都港区六本木7-22-2)

参加費無料

文化庁は、現代アートの振興施策に関するシンポジウム「グローバル化する美術界と『日本』：現状と未来への展望」を開催いたします。本シンポジウムは、政府成長戦略の観点でも注目されている「文化庁アートプラットフォーム事業」が果たすべき役割をテーマとしています。現代アートの関係者が集い、グローバルの最前線で起きていることを共有しながら、なぜ日本において現代アートのプラットフォーム形成が必要なのか、そのために何をすべきなのか、どのような可能性が啓けるのかについて、議論を深めることを趣旨に開催するものとなります。シンポジウムは「文化庁アートプラットフォームシンポジウム」の名称でシリーズ開催する予定で、今回が第1回目となります。

プログラム (敬称略)

15:00～15:20 文化庁アートプラットフォーム事業について

片岡真実 / 森美術館副館長兼チーフ・キュレーター、日本現代アート委員会座長
林 道郎 / 美術評論家、上智大学国際教養学部教授、日本現代アート委員会副座長

15:20～15:50 ゲストプレゼンテーション

[ヴェネツィア・ビエンナーレ2019企画展招へい作家]

片山真理 / アーティスト
久門剛史 / 美術作家

16:00～17:00 パネルディスカッション

石井孝之 / タカ・イシイギャラリー代表、日本芸術写真協会代表理事
田口美和 / タグチ・アートコレクション
片山真理 / アーティスト
久門剛史 / 美術作家
[モデレーター] 片岡真実 林道郎

17:00～17:45 参加者交流会



参加申し込み

ご参加ご希望の方は、右記QRコードの申し込みサイトからご登録ください。



お問い合わせ：文化庁アートプラットフォーム事業事務局

上記申し込みサイト内のコメント・お問合せ欄にご記入の上送信ください。

シンポジウム概要URL

http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1420337.html

グローバル化する美術界と『日本』： 現状と未来への展望

登壇者プロフィール(敬称略・五十音順)



石井孝之 / タカ・イシイギャラリー代表、日本芸術写真協会代表理事

1963年東京生まれ。1982年に渡米。ロサンゼルスでファインアートを学ぶ傍ら現地でプライベート・ディーラーとしての活動を始める。帰国後の1994年、東京・大塚にタカ・イシイギャラリーを開廊。独自の審美眼と国際的な視座で、国内・国外、キャリアやメディウムなど様々な作家とともに多彩なプログラムを展開。荒木経惟、森山大道、畠山直哉など日本を代表する写真家や、五木田智央、法貴信也、川原直人、村瀬恭子らの画家、そして荒川医、木村友紀、前田延紀、竹村京など新進気鋭の日本人作家や、トーマス・デマンド、ダン・グラハム、スターリング・ルビー、クリス・ウィン・エヴァンスら国際的に評価の高い作家の作品を扱う。現在東京・六本木に2箇所と香港にギャラリースペースを展開。



片岡真実 / 森美術館副館長兼チーフ・キュレーター、日本現代アート委員会座長

ニッセイ基礎研究所都市開発部、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館、2018年10月より現職。2007年から2009年はハイワード・ギャラリー(ロンドン)にて、インターナショナル・キュレーターを兼務。第9回光州ビエンナーレ(2012年)共同芸術監督。第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督(2016-2018年)。CIMAM(国際美術館会議)理事(2014年〜)、京都造形芸術大学大学院教授(2016年〜)。森美術館では、小沢剛(2004)、アイ・ウェイウェイ(2009/2012-2014)、イ・ブル(2012)、会田誠(2012)、リー・ミンウェイ(2014-2015)、N・S・ハルシャ(2017)、塩田千春(2019)など、日本及びアジア各地の中堅作家の個展を数多く企画。また日本の現代アートシーンを紹介する「六本木クロッシング展」を2004年と2013年に共同企画。「サンシャワー:東南アジアの現代美術展 1980年代から現代まで」も2017年に共同企画。その他、日本及びアジアの現代アートを中心に執筆・講演等多数。



片山真理 / アーティスト

1987年、埼玉県生まれ。群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。先天性の四肢疾患により9歳の時に両足を切断。身体を模った手縫いのオブジェや立体作品、装飾を施した義足を使用しセルフポートレートを制作。自身の輪郭をなぞれば、他者に続き、小さな暮らしから社会、世界へ、糸と針はパッチワークのように様々な境界線を縫い繋げていく。作品制作の他に「ハイヒールプロジェクト」として特注の義足用ハイヒールを装着し歌手、モデル、講演など多岐に渡り活動している。「選択する自由」獲得のためならアートも身体もどんなものでも利用するのがハイヒールプロジェクトのモットー。主な展示に2019年「Broken Heart」(White Rainbow, ロンドン, イギリス)、2017年「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」(東京都写真美術館、東京、日本)、「帰途-on the way home-」(群馬県立近代美術館、群馬、日本)、2016年「六本木クロッシング 2016展:僕の身体、あなたの声」(森美術館、東京、日本)、2013年「あいちトリエンナーレ 2013」(納屋橋会場、愛知、日本)など。主なパブリックコレクションにラ・メゾン・ルージュ(パリ、フランス)森美術館(東京、日本)、東京都写真美術館(東京、日本)など。主な出版物に2019年「GIFT」United Vagabondsがある。



田口美和 / タグチ・アートコレクション

ソーシャルワーカー、専門学校や大学等の講師として勤務の後、父・田口弘が始めたタグチ・アートコレクションの運営に2013年頃より従事。近年は精力的に国内外のアートフェア、展覧会、ギャラリーを訪問し、コレクションの充実と公開に努めている。現在、コレクション展が北海道巡回中(『球体のパレット』9/7〜道立函館美術館、11/19〜札幌芸術の森美術館)。最近是一般社団法人アーツプラスを立ち上げ、鑑賞者の裾野を広げるための活動を開始。海外事情のレクチャー企画等を実施している。

タグチ・アートコレクション <https://taguchiartcollection.jp/>

一般社団法人アーツプラス <https://www.facebook.com/artsplus2019/>



林 道郎 / 美術評論家、上智大学国際教養学部教授、日本現代アート委員会副座長

1959年生まれ。近現代美術史・美術批評。主な著書に『静かに狂う眼差し』(水声社、2017年)、『死者とともに生きる』(現代書館、2015)、『Natsuyuki Nakanishi』(New York: Fergus McCaffrey Gallery, 2014)、『Tadaaki Kuwayama』(Fellbach: Edition Axel Menges, 2014)、『絵画は二度死ぬ、あるいは死なない』(全7冊)(2003-9、ART TRACE)など。共編書に『シウルレアリスム美術を語るために』(鈴木雅雄と共著、水声社、2011年)、『From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989』(New York: The Museum of Modern Art, 2012)など。キュレーターとして「Cubism in Asia」(2005年、東京国立近代美術館-韓国国立現代美術館-シンガポール国立美術館の共同展、DIC/川村記念美術館の「静かに狂う眼差し」2017年)などに関わる。美術批評誌『ART TRACE PRESS』の編集を務める。



久門剛史 / 美術作家

1981年、京都府生まれ。京都府在住。様々な現象や歴史を採取し、音や光、立体を用いて個々の記憶や物語と再会させる劇場的空間を創出する。近年の主な展覧会に、個展「MoCA Pavilion Special Project Tsuyoshi Hisakado」(上海当代芸術館、2016)、あいちトリエンナーレ2016、「MAMプロジェクト025:アピチャッポン・ウィーラセタクン・久門剛史」(森美術館、2018)。現在、アピチャッポン・ウィーラセタクンとの共作が、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展「May You Live in Interesting Times」(2019)で展示中。2020年3月には豊田市美術館で国内初の大規模な個展を開催予定。2016年には世界各国で上演された「チェルフィッチュ」部屋に流れる時間の旅の舞台美術を担当した。

近年の主な受賞に「日産アートアワード2015」オーディエンス賞、「平成27年度京都市芸術文化特別奨励者」、「VOCA展2016」VOCA賞、「メルセデス・ベンツ アート・スコープ 2018-2020」などがある。 <http://tsuyoshihisakado.com/>

「文化庁アートプラットフォーム事業」とは

日本における現代アートの持続的発展を目指し、現代アートの関係者の意見を幅広く集約し、日本人及び日本で活動する作家の国際的な評価を高めていくための取組等を推進するものです。同事業はステアリングコミティーとして「日本現代アート委員会」を設置しており、実践的研究を進めるための国際的な専門家ネットワーク構築に取り組むとともに、戦後の日本美術に関する重要テキストの翻訳やWEBを活用した海外発信、全国の美術館を横断した作品情報のデータベース構築などを目指す活動を行っています。また、同事業は、ヴェネツィア・ビエンナーレ2019企画展招へい作家への支援も行いました。